

原著論文

スポーツにおける言語論再考 — コーチング場面で話される言葉に着目して —¹

広瀬 健一 (福岡大学スポーツ科学部)²
深澤 浩洋 (筑波大学体育系)³

Abstract

The purpose of this paper was to depict the theoretical background of the language used in coaching scenes through the reexamination of the language used in coaching sessions.

Focusing on the dialogue situation between the coach and the learner, it is divided into a “scientific language” which is a “denotational language” and a “waza language” which is a “metaphorical language”. According to Saussure (Ferdinand de Saussure, 1857-1913), the language is made up of signs, and this sign is divided into a concept (signifié) and a sound-image (signifiant). “Shoot” is to throw the ball into the goal in the basketball and anyone can do that if it is told, “bend an elbow at a 90-degree angle”. In this case, “shoot” is a signifiant and “throw the ball into the goal” indicates signifié. To consider for “denotational language”, the way of thinking with language as a sign is considered to be effective.

Saussure declared the language acts by individual speakers as “parole”. Focusing on the interactive situation of “parole”, Benveniste (Émile Benveniste, 1902-1976) assumed the concept of linguistics of discourse. He said that the words will reproduce “reality”. In the background of the establishment of communication, there is a process in which a dialogue person recapture “reality” assumed by a speaker. In actual coaching scenes, the words used in the dialogue between the coaches and the learners are used in a special meaning, or new words are created during trial and error between the coaches and the learners. In such cases, it is thought that considering approaching “semantic meaning” towards the understanding of “reality” assumed by the speaker is effective.

From the above, two kinds of languages in the coaching scenes were confirmed that the language which must strictly define the meaning, and the language which the meaning may change each time depending on the relationship between the speaker and the interlocutor.

¹ Reconsideration of the linguistic theory in sports: Focusing on words in the coaching scenes

² Kenichi HIROSE, Faculty of Sports and Health Science, Fukuoka University, 8-19-1 Nanakuma, Jonan-ku, Fukuoka 814-0180, Japan

³ Koyo FUKASAWA, Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574, Japan

Keywords: coaching, dialogue, le discours

キーワード: コーチング, 対話, ディスクール

1. はじめに

スポーツの実践的研究では、言語¹⁾を主題として取り扱ったものが見受けられ、運動と言語に関する検討が行われている。例えば、蹴上りへの指導における、「足首を鉄棒に近づけて」や「ズボンを履くように」といった指導言語は、運動の習得を促すために、指導者²⁾が発する言葉として挙げられる。及川ら³⁾はソフトボールの選手と指導者を対象に、両者が重要視している動作を表現する言語を抽出しており、佐藤⁴⁾はハンドボールに特有な運動に関して、観察と記述によって、ハンドボールに特有な運動をとらえるのに有効な言語を検討している。これらの研究からうかがえるのは、運動を言語化することは、その競技特有の運動を理解するとともに、重要視されている運動技術の把握に有用であるということである。このような背景を踏まえた上で、本稿の立場を示しておきたい。本稿で主題となるのは、コーチング場面で指導者や学習者が発する言葉についてである。まずは、筆者がこのような議論を提起する契機となった、凶子による「体育方法研究およびコーチング学研究が目指す研究のすがた」の一節を参照することにしたい。

コーチや指導者の用いる研究方法が不明瞭であり、また曖昧で共通理解の難しい言葉を利用していることが指摘されることも多い。一義的に定義していない言葉を使うことが不適であることを示す研究者は多いが、それには問題があると思っている。言葉にはまず定義があり、それを経て利用されているというものではない。まず始めに利用があり、その

中で試行錯誤を繰り返して意味が付され、共通感覚を導く言葉へと確定されていると思われる。つまり、コーチや指導者が学びの中で利用している言葉であり、なおかつある種の共通感覚を導く言葉として確定されているならば、それが科学的な説明を付していないという理由や、基礎研究を行う研究者に理解できないという理由によって、その言葉の利用が否定されたり、阻害されたりすることがあってはならない。しかし、このような指摘を前提にして、コーチや指導者の記述したものが非難されている状況は少なくない⁵⁾。

小川は、論文で使用される言語は、「厳密に概念規定された言語を用いる」ことが条件であると述べている⁶⁾。確かに、ルールブックに記載されているパスやシュートといった用語が、違った意味で使用されることはまず考えられない。ところが、コーチング場面に目を向けると、「椅子に座るように腰を落として」や「構えたところからグッと力を入れて」などの比喩的な表現を多用しているのではないだろうか。このような、コーチング場面を対象にした研究における、曖昧で、多義的な言語が、否定もしくは軽視されるような現状は、実践系研究者にとっては看過できない問題であるように思われる。

本稿の目的は、実践系研究におけるこのような現状を踏まえ、スポーツにおける言語、とりわけコーチング場面で使用されている言語の再検討を通して、コーチング実践で使用される言語の原理的な背景を描き出すことである。この試みによって、コーチング場面の言語を取り扱う研究への意義を示すことができると考える。

2. 先行研究の検討

2.1 スポーツにおける言語のカテゴリー化

まずは、コーチング場面における言語に関して、先行研究を概観することにした。スポーツ全般の言語をカテゴリー化させる検討を小川が行っている⁷⁾。小川はスポーツに関わる言語を、スポーツ構造に関わる言語とスポーツ現象に関わる言語に分類し、これらはいずれも直示的言語と比喩的言語に属するとした。直示的言語は、言語と指し示される対象が直接的な結び付きを持つものであり、スポーツ構造に関わる「構造—直示的」、およびスポーツ現象に関わる「現象—直示的」に区別される。「構造—直示的」言語は、スポーツを明確に規定している言語であり、ルールを示す言語、パス・シュートといった運動様式を示す言語があげられる。「現象—直示的」言語は、個々のスポーツ現象を明確に伝達する言語であり、例として、命令、指示、勧め、否定、禁止などの相手に即座に伝える言語があげられる。一方の「比喩的言語」は、言語が対象を直接的に指し示しているわけではなく、あくまでも間接的にしか結び付いていないものであり、スポーツ構造に関わる「構造—比喩的」、および、スポーツ現象に関わる「現象—比喩的」に分類可能であることが示されている。「構造—比喩的」は、そのスポーツが持つ特徴をより効果的に表現する言語であり、スポーツの価値観を示す言語や、プレーの「きれ」や腰の「ため」などスポーツ現象から抽出されて概念化された言語があげられる。「現象—比喩的」は、個々のスポーツ現象をより効果的に伝達する言語であり、例として、「うで！」という言葉が、A君に対しては「うでをもっと曲げること」、B君に対しては「うでを強く振ること」と意味されるように、ある特定の関係内で成立すれば良い「コード成立的言語」⁸⁾とされている。

2.2 コーチング場面における言語

次に、コーチング場面における、指導者と学習者の対話的情况に焦点を絞ることとする。生田は、「手を右上45度の角度に上げなさい」のような、ある事柄を正確に記述、説明することを目的とする言語を「科学言語」と名付けた⁹⁾。そして、学習者のわざ習得のプロセスにおいて、そこには特殊な、記述言語、科学言語とは異なる比喩的な表現を用いた言語が介在していることに着目し、それをわざ言語と名付けている¹⁰⁾。わざ言語は、科学言語のようにある事柄を正確に記述、説明することを目的とするのではなく、相手に関連ある感覚や、行動を生じさせたり、現に行われている活動の中身を改善する時に用いられる用語¹¹⁾と定義されている。生田はわざ言語の例として、声楽の“chest voice (胸声)”や“head voice (頭声)”，「目玉のウラから声を出しなさい」、「目の下に棚を感じて声を出しなさい」、「頭をつるようにして声を出しなさい」を挙げている¹²⁾。

佐野は、促発言語と創発言語の視点から、コーチング場面における言語の検討を行っている¹³⁾。佐野は、指導場面において用いられる、指導者が発する言葉や表現を促発言語と名付けた。促発言語は、「指導者自身が“できる”や“できた”ときの感じを単に言い表そうとしたことばではない。そうではなくて、指導者が学習者の動きかたを分析してみて、『こうすれば学習者はできる(のに)』とか『そうしないから…できない(のだ)』というようにして、指導者が第三者の立場から見て出てきた表現であり、またそれは学習者が“できる”ようになるための可能性に向けられたことばや表現でなければならない」と述べている¹⁴⁾。一方の創発言語は、「学習者自身が責任を持ち、実際にそれによって動きを発生させたと学習者本人が思っていて、学習者自身によってコツとして語られることば」¹⁵⁾である。「学習者自身によって語られるコツは、言うまでもなく、学習者自身にしか

分からない単語や表現を用いているとともに、それは主観的、感覚的、感情的である」¹⁶⁾と佐野が述べるように、創発言語は、曖昧で、多義的な性質を持った言語であると言えるだろう。

このように、運動の表現や指導に関わる言語は、科学言語に代表される直示的な表現と、わざ言語に代表される比喩的な表現に大別することができよう。これらの言語は、指導者がわざの習得や発達を促す観点を基に発せられる言語と、学習者が自身のコツを表現する言語にも分類できる。とりわけ、促発言語は「学習者が“できる”ようになるための可能性に向けられたことばや表現」¹⁷⁾であることが条件であり、「特殊な言い回しや表現だけでなく、現場で指導者が用いるごく普通の表現であっても、それらは学習者に適切な運動体験をさせる」¹⁸⁾ことに力点が置かれていることから、わざ言語ならびに科学言語を包括した概念であると思われる。なお、比喩的言語もスポーツの中に定着し、多くの人に慣用的に使用されるようになると、直示的言語としての機能を果たすようになる場合もあるように、言語のカテゴリー間の移動もあり得るとされている¹⁹⁾。

以上の先行研究から、コーチング場面における言語は、一般的に認識されているような言語から、そのスポーツに関わっていないと理解できないような、特殊な言語も存在すると言える。しかしながら、たとえこれらの言語がコーチング実践に寄与するものであったとしても、これまでの研究においては、コーチング場面における言語の原理的背景については詳細に議論されてこなかった。これは、我々はどのような理由によって言葉を発しているのか、ということや、なぜ曖昧で、多義的な言葉を使用してしまうのか、についての議論のことを指すものである。この議論は、実践系研究を支えるための基礎論を提示する働きを担うと考える。したがって、コーチング場面で使用されている言語を考察するための観点を探るためにも、まずは

言語そのものに焦点を当てる必要があるだろう。そのために、本稿では、言語学の知見を援用し、言語の特質を踏まえることにする。

はじめに、スポーツ全般の言語に対して、ソシユールの言語学的視点から説明を試みる。その理由として、ソシユールは、言語と概念との関係を理解するための理論を提示しているからである。続いて、対話で使用されている言語の特質について、リクールを引用して検討する。その理由は、以下に述べるバンヴェニストの言語論の基礎となる、対話的情况に対する視点を提供しているからである。その上で、バンヴェニストが提唱したディスクールの言語学を参照する。理由としては、彼は対話的情况における言葉に着目した理論を提示しているからである。最後に、彼らの言語学的知見とコーチング場面の言語論との接続を試みる。上記の手続きを通して、コーチング場面で使用されている言語を考察するための原理的背景を提示する。

3. 言語学的アプローチ

3.1 ソシユールのアプローチ

本章では、コーチング場面で話される言葉に対して考察を試みる。まずは、ソシユールに依拠した言語学的アプローチを検討したい。

3.1.1 ランゲージュ・ラング・パロール

ソシユールの言語学においては、「ランゲージュ」、「ラング」、「パロール」という、3つの概念が登場する。ソシユール研究で著名な丸山によると、「ソシユールは、まず人間の持つ普遍的な言語能力・抽象能力・カテゴリー化能力およびその諸活動をランゲージュ *langage* とよび、個別言語共同体で用いられている多種多様な国語体をラング *langue* とよんで、この二つを峻別した」²⁰⁾とある。ランゲージュについては、人間の言語能力に対する「生得的な潜在能力」²¹⁾であり、「人類を他の動物から弁別する

しるし²²⁾とされている。ラングに関しては、「ランゲージュがそれぞれ個別の社会において顕現されたものであり、その社会固有の独自の構造を持った制度」²³⁾、「個々人の脳の中に潜在的に存在している文法体系」²⁴⁾である。例えば、日本の社会で生まれ育った者が持つラングは、日本語であると言えよう。また、パロールについては、「ラングという社会契約によって自らの能力を実現する個人の行為の謂」²⁵⁾であり、「人が語るためには、ラングの宝庫が常に必要である」²⁶⁾と丸山が説明するように、人が言葉を発する際は、ラングから適当な言葉を選択して、パロールとして実現していると言えよう。例えば、バスケットボールにおいて「シュート」はゴールにめがけてボールを放つことであり、「肘を90度に曲げる」と指示されれば、誰もがその動きができるだろう。また、ソシユールに従えば言語は記号である。彼は『概念』と『聴覚映像』は、それぞれ『シニフィエ』(signifié)と『シニフィアン』(signifiant)と呼ぶことにしたい²⁷⁾と述べ、記号を概念と聴覚映像²⁸⁾に峻別した。この場合、「シュート」という聴覚映像がシニフィアンであり、「ゴールにめがけてボールを放つこと」という概念がシニフィエであると言える。

3.1.2 言語の恣意性・分節性・否定性

ソシユールは、言語の恣意性という概念を提唱した。丸山の解説によると、この場合の恣意性というのは「同じ事物や概念を、それぞれの言語では勝手に別々の呼び名で表している」²⁹⁾ということである。例えば、体育の授業で学生の識別を目的に使用される「数字などが印刷されている着用物」は、ゼッケン、ピブスやナンバリングと呼ばれているだろう。これは、数字などが印刷されている着用物(シニフィエ)と呼ばれ方(シニフィアン)の結びつきは、恣意的であることを示す例である³⁰⁾。

また、丸山は「犬」と「狼」という語で表

される動物が、はじめから二種類に分けられる必然性がないことについて、「あらゆる知覚や経験、そして森羅万象は、言葉の網を通して見る以前は連続体」³¹⁾であると説明している。ソシユールに従えば、「思考は星雲のようなもので、必然的に境界を定められたものは存在しない」³²⁾という見方である。すなわち、無限に広がる星空から、人々が星座を作り出したように、言語は概念の連続体を分節化する機能を持つ。そして概念の分節化の方法は恣意的であると言える³³⁾。

このような観点によれば、「走高跳」は英語にすると「high jump」であるが、「棒高跳」は「pole vault」である。日本語では「跳」と言う概念で一括されているが、英語では「jump」と「vault」に分別される。同じように、「投げる」行為に関しても「ハンマー投」は「hammer throw」であるのに対し、「砲丸投」は「shot put」であり、日本語では「投」で統一されているのに対し、英語では「throw」と「put」に分けられる。さらに、日本において、ハンマー投の指導用語として、「ハンマーを振る」と言うが、英語では「Push the hammer.」と表現される。しかし「振る」という単語から「push」の概念を連想することは極めて難しい。これは、回転しながらハンマーを加速させる、ハンマー投の運動を言葉で言い表す際に、異なるラングに属する人々が、それぞれの言語コードで共有された概念を言語化した結果であると思われる。以上のような例は、概念を分節し言語化する際、ラングの違いによって、その線引きが異なることの例証であると言える。

ソシユールによると、言語は「体系中の他の項目との関係によって消極的に定義されるもの」³⁴⁾であり、彼は言語の否定性を唱えた。丸山の解説によると、「狼」、「犬」、「山犬」、「野犬」の関係は、「その体系の中では、個々の単位と大きさとか価値は、ネガティブにしか規定されない」³⁵⁾のである。すなわち、「狼」は「犬」でもなく、「山犬」

でもなく、「野犬」でもないもの、それが「狼」であるという見方である。ソシユールに言わせれば、「価値の最も正確な特徴は、他の価値がそうであるものではないということなのである」³⁶⁾。例えば、「シュート」という概念は、パスではない、スローインではない、〇〇ではない、・・・、のようにして「シュート」の概念を否定的に画定していると考えられる。

3.2 対話的情况における言語の特質

このような、ソシユールの視点による言語感とは、言語というものが、音と概念の結びつきや他の言語との差異によって価値を持つという、言語を記号と見做す視点を我々に提供するものである。しかし、この視点は指導者たちの経験に基づいた言語感とは符合しないと言えるのではないだろうか。というのは、我々の問題意識は、音は同じであっても違う意味で受け取られる言語が存在することや、そもそも競技の経験がないと意味が理解できないような言語に対する視点を探ることにあった。そのため、実際のコーチング場面で使用されている言語の実態に着目する方途を示しておく必要があるだろう。

まずはそれに先立って、対話的情况における言語とはどのようなものなのか、について確認しておきたい。その理由として、コーチング場面の言語の使用情況に目を向けると、指導者と学習者の存在が不可欠であり、両者が言葉のやりとりを行なっていることが前提条件として考えられるからである。これは、ソシユールではパロールに分類された、話すという行為がコミュニケーションの道具として使用されている情況を指している。このような対話的情况における言語について、リクールは以下の5つの特質を挙げている。すなわち、「話すことは実際の出来事であり、一時的な、消えていく行為である」³⁷⁾、「言述（ディスクール）は、ある意味が選ばれ、別の意味が排除されるという、選択の連続によって構成される」³⁸⁾、「これらの

選択は、新しい組み合わせを作り出す。全く新しい文を述べ、それを理解すること、それが言語行為およびパロールを理解することの本質である。この選択によって生成された文は有限で閉ざされた記号の組み合わせによって、無限の新しい文を生み出すことができる」³⁹⁾、「言語（ランゲージュ）が指示を持つのは言述（ディスクール）の瞬間である。話すことは何かについて何かを言うことである」⁴⁰⁾、「コミュニケーション行為の本質は誰かが誰かに向かって話すことである。（…略…）。パロールの主観的行為は直ちに相互主観的行為になる」⁴¹⁾である⁴²⁾。

彼が論じていることをまとめると、対話とは誰かが誰かに向かって話すことであり、その状況における言葉は、記号の組み合わせによって、特定の意味を有した文の形で実現される。そして、対話的情况における言語は、何かについて何かを言うことを前提条件に持つものとして見做すことができる。その上で、対話は発話者の言葉を対話者が理解することで成立する、相互主観的行為であることもわかる。このような、「指導者—学習者」の構図をもつコーチング場面における言語の特質を押さえた上で、バンヴェニストが提唱したディスクールの言語学をみていくことにしたい。

3.3 バンヴェニスト的アプローチ

ここからは、言語学者バンヴェニストが提唱した、ディスクールの言語学の基本的理念となる、対話的情况における言語の機能についてみていくことにしたい。

ことばは現実を再=生産（下線原文）〔=再現〕する。まさに文字どおり、ことばという通訳の手を通して、現実があらためて生産されるのである。話す人は自分の話 discours によって、出来事と、その出来事についての自分の経験とをそこによりみがえらせる。聞く方の人は、まずこの話をとらえ、それを通じて、

再現された出来事をもとらえるのである。ことばの行使に固有な状況はやりとりであり、対話であり、それが上記のように話の行為に二重の機能を付与する。すなわち、話は、話し手にとっては現実を表し、聞き手にとってはその現実を再創造するものである。かくしことばは、主体同志の間のコミュニケーションの道具となるのである⁴³⁾。

バンヴェニストによると「ことばは話されるかぎりにおいては、《言いたいこと》を送信するのに用いられる」⁴⁴⁾。例えば、「パス」と誰かが発し、対話者がその場で「パス」を実行する場面を思い浮かべてみよう。バンヴェニストに従えば、「パス」は発話者が想定した「現実」を指示しており、聞き手は発話者が想定した「パス」という「現実」を再生産する。この言葉の二重の機能によって、「パス」という言葉を理解したという見方ができよう。

また、バンヴェニストは、言語の表意作用に関して、記号論的意味と意味論的意味の2つの概念を提唱した。記号論的意味は、「それ〔言語記号〕が実際に存在するかどうか（〔〕内引用者）」⁴⁵⁾が問われる。例えば、「はしる（走る）」は意味のある記号であるが、語の順序を入れ替えた「しるは」は意味を持たない記号としてみなされる。なお、この次元の議論は本稿の対象にならない。続いて、その記号が存在する場合には、「一部分だけ形が異なるシニフィアンあるいは、意味的に隣接しているシニフィエと比較して、他の記号との境界を画定する」⁴⁶⁾とバンヴェニストは述べている。例えば、「サッカー」と「フットサル」という語の比較は、意味的に隣接しているシニフィエの比較である。「サッカー」を規定する要因と「フットサル」を規定する要因を厳密に規定し、境界を確定させることが記号論的意味を持つ言語の捉え方であると思われる。この言語は、「それが言語共同体の成員によってシニフィアンとして承認された時

に存在する」⁴⁷⁾言語として位置付けられるものであり、言語記号と指示対象がそのつど変化することはなく、ラングの共同体の中において、共通理解されていることを前提条件に持つものとして理解できる。

続いて、バンヴェニストは、発話者が行使する言語に対して、「ディスクール（言述）」という概念を想定した。バンヴェニストによると、「記号論的意味（記号）は、認識されなければならない。一方、意味論的意味（ディスクール）は理解されなければならない」⁴⁸⁾とあり、ディスクールの意味論的考察においては、理解に向けた考察が要求されることを示した。先の「シュート」という言葉についてみてみよう。記号論的意味としての「シュート」は、先に述べたように、辞書的な意味としての「シュート」である。一方の意味論的意味に関しては、具体的なパロールに対する考察の視点である。例として、多義的な言語の使用場面を考えてみると、サッカーの試合中、監督が「シュート」と叫んだ場合、「ゴールに向かってボールをキックしろ」という意味であるかもしれないし、対戦相手の「シュートをディフェンスしろ」という命令かもしれない、はたまた「シュート」という戦術名かもしれない。このように、ディスクールは話し手と聞き手が存在し、置かれた状況との関係で、そのつど個別の意味と指示を持つものとして捉えるべきだろう。仮にこれらの意味で「シュート」が使用され、コミュニケーションとして成立している状況、つまり発話者が想定した「現実」と、聞く人が想定した「現実」の一致がなされているのであれば、発話者のディスクールを理解したと言えるだろう。

冒頭で述べた、「構えたところからグッと力を入れて」のようなオノマトペや、「椅子に座るように腰を落として」というわざ言語は、確かに曖昧で多義的な表現である。しかし、これらの言語は発話者にとっては、《言いたいこと》を表現する言葉である。そして、対話者とのコ

コミュニケーションを可能にしているのは、ディスクールによって再生産された、「現実」の共有であると言える。例えば、ハンマー投の指導場面で、学習者に重心を下げ、安定したターン動作を習得させるために、「椅子に腰掛けるように」と指導することがある。ある事柄を正確に記述、説明するのに用いられるはずの科学言語を使用しない場合、つまり、「膝を90度に曲げる」や、「腰を10cm真下に落とす」と発言しない理由としては、発話者によって想定される「現実」を言い表すための言葉、つまり《言いたいこと》が科学言語では正確に表現できない場合が考えられるだろう。これは、発話者が曖昧で、多義的な言葉であったとしても、“その言葉”を選ぶ必要性があり、“その言葉”を使用することが、指導に最も有効であり、かつ学習者の理解を促すことの根拠を示すものであると考える。この点に、コーチング場面において、ある意味で特殊と見做されてきた言葉を使用する意義があると言えるだろう。

このように、実際のコーチング場面においては、「指導者—学習者」間で使用されている言語が特別な意味で使用されていたり、指導者と学習者の試行錯誤の過程で、新しい言葉が生まれ出されたりもする。その場合は、発話者が想定した、「現実」への理解に向けた、意味論的意味に迫る考察が有効であるように思われる。以上から、言語記号のシニフィエとシニフィアンの対応関係に着目する言語と、発話者が想定した、「現実」に着目する言語に対する考察への視点は、区別されなければならないことが示された。

4. おわりに

本稿の目的は、コーチング場面で使用されている言語の再検討を通して、コーチング実践で使用される言語の原理的な背景を描き出すことであった。まず、コーチング場面における言

語は、「指導者—学習者」の構図を持つ、対話的情況において使用されることが、前提条件としてあげられた。そして、対話は「誰かが誰かに向かって話す」という活動の中で、発話者の言葉を、対話者が理解することで成立する、相互主観的行為であることが確認された。その上で、バンヴェニストが想定した、ディスクールの言語学の知見を援用し、コーチング場面における言語について議論を試みた。考察の結果、コーチング場面における言語は、科学言語や直示的な表現のように、意味を厳密に規定しなければならない言語、およびわざ言語や促発言語のような、発話者と対話者の関係によって、そのつど意味が変化する可能性がある言語、以上の2つが確認された。その中で、コーチング場面における、曖昧で、多義的な言語に関しては、発話者の《言いたいこと》によって指示された、「現実」の理解に向けた考察が要求されることが明らかとなった。

本稿で議論された言語の機能をもとにすると、コーチング場面における、言葉が「通じない」という問題を取り扱う際、ひとつの観点を提供できると思われる。例えば、指導者の言葉が学習者に「通じない」という現状は、指導者の《言いたいこと》を学習者が共有できない、すなわち言葉によって想定された、「現実」の不一致によるものと見做すこともできる。これは、先に図子が述べたように、「まず始めに利用があり、その中で試行錯誤を繰り返して意味が付され、共通感覚を導く言葉へと確定されている」背景を説明するものである、と言えるのではないだろうか。本稿の議論によって示された観点をもとにすると、この図子の引用文の内容は、発話者が想定した「現実」と、対話者の想定した「現実」の不一致から始まり、次第にその「現実」が共有されていく過程が述べられていると見做すこともできる。このような過程は、トップアスリートのコーチングから、体育の授業における指導まで、運動習得に向けた言

語の使用に通底する理論となる可能性を示唆するものであるが、この点に関しては、今後の検討課題とすることにしたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、福岡大学人文学部フランス語学科・川島浩一郎教授から貴重なご意見と温かい励ましをいただいた。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

注および引用・参考文献

- 1) 本稿における、「言葉」および「言語」の定義は、滝沢文雄（2009）運動実践における言語の役割とその限界. 体育・スポーツ哲学研究, 31（1）に則り、「言葉」は日常的に話されている個々の単語やその連なりを意味しており、その言葉（word）を含め、意味を伝える記号の総体を「言語（language）」と表記した。ただし、文献の引用を表記した場合はその限りではない。
- 2) 本稿で用いる「コーチ」と「指導者」は同義である。特に指定がない場合は、「指導者」を用い、引用で「コーチ」と記述されている場合にのみ「コーチ」と記載した。また、「選手」と「学習者」は同義であり、引用で「選手」と記述されている場合にのみ「選手」と記載した。
- 3) 及川千絵、勝田 隆、関岡康雄（2003）ソフトボールにおける指導言語に関する研究—高校女子プレーヤーとその指導者を対象として—。仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集, 4, pp.35-40.
- 4) 佐藤 靖（1983）ハンドボール競技における運動認識に関する一考察—観察と記述による運動のとらえ方について—。体育・スポーツ哲学研究, 4 and 5, pp.131-146.
- 5) 関子浩二（2012）体育方法研究およびコーチング学研究が目指す研究のすがた。コーチング学研究, 25（2）, p.208
- 6) 小川 宏（1995）スポーツにおける言語のカテゴリー論的類型化の試み. 体育・スポーツ哲学研究, 17（2）, p.7.
- 7) 同上論文, pp.3-12.
- 8) 小川によると、「我々は常に直接的で厳密な言語表現をしなければならない、ということではないし、伝えたい内容が正確に相手に伝わるなら、直接的表現よりも効率的、効果的な別の（間接的）言語表現がふさわしい。そしてそうした比喩的言語（表現）はスポーツ世界の中では、『コード成立的言語』としてスポーツ指導場面に特徴的に表れてくる。」と述べている。同上論文, p.8.
- 9) 生田久美子（1987）「わざ」から知る。東京、東京大学出版社, p.97.
- 10) 同上書, p.96.
- 11) 同上書, p.96.
- 12) 同上書, pp.96-97. なお、わざ言語に関する研究は野村幸正（1999）臨床認知科学—個人的知識を超えて。大阪、関西大学出版部, p.132, 岡田暁生（2009）音楽の聴き方—聴く型と趣味を語る言葉。東京、中央公論新社, p.64, および柴田庄一・遠山仁美（2003）技能の習得過程と身体知の獲得—主体的関与の意義と「わざ言語」の機能—。言語文化論集, 24（2）, p.84があり、「わざ」言語について、概ね生田と同様の解釈を示している。
- 13) 佐野 淳（2013）コツの言語表現の構造に関する発生運動学的研究。筑波大学（コーチング学）学位論文.
- 14) 同上論文, p.4.
- 15) 同上論文, p.124.
- 16) 同上論文, p.5
- 17) 同上論文, p.4.
- 18) 同上論文, p.4.
- 19) 小川 宏（1995）, p.10.
- 20) 丸山圭三郎（1981）ソシユールの思想。東京、岩波書店, p.79.

- 21) 同上書, p.80.
- 22) 同上書, p.80.
- 23) 同上書, p.80.
- 24) Saussure, F. (1968) Cours de linguistique générale. Paris, Payot, p.31. 『ソシュール, F. : 町田健訳 (2016) 新訳ソシュール一般言語学講義. 東京, 研究社, p.31.』
- 25) 丸山圭三郎 (1981), p.83.
- 26) 同上書, p.85.
- 27) Saussure, F. (1968), p.99. 『ソシュール, F. (2016), p.102.』
- 28) ソシュールは、「聴覚映像は、物質的な音、つまり純粹に物理的なものではなく、音の心的な刻印、つまり人間の感覚によって、その存在が証拠づけられる表示である。」と述べている。 *Ibid.*, p.99. 『同上書, p.102.』
- 29) 丸山圭三郎 (1981), p.143.
- 30) 小倉は言語の恣意性について、「『イヌ』という音と、その音が表す動物との間には必然的な結びつきはない。その証拠に、フランス語では同じ動物を chien と、英語は dog と言う」と述べている。小倉博行(2011) フランス語学小事典。髭郁彦, 川島浩一郎, 渡邊淳也編, 駿河台出版社, 東京, p.88.
- 31) 丸山圭三郎 (1981), p.118.
- 32) Saussure, F. (1968), p.155. 『ソシュール, F. (2016), p.158.』
- 33) 例えば、「イヌ」はフランス語では「chien」と表記されるが、「chien」は日本語で「タヌキ」というシニフィアンが与えられている動物も指す。小倉 (2011) 前掲書, p.88.
- 34) Saussure, F. (1968), p.162. 『ソシュール, F. (2016), p.165.』
- 35) 丸山圭三郎 (1981), p.96.
- 36) Saussure, F. (1968), p.162. 『ソシュール, F. (2016), p.165.』
- 37) Ricœur, P. (1967) La structure, le mot, l'événement. Esprit, 360 (5), pp.808-809.
- 38) *Ibid.*, p.809.
- 39) *Ibid.*, p.809.
- 40) *Ibid.*, p.809.
- 41) *Ibid.*, p.810.
- 42) 以上5箇所訳出にあたり、久米博 (2012) テキスト世界の解釈学: ポール・リクールを読む。新曜社, 東京, p.80 および、野家啓一 (1978) 言語行為の現象学・序章, 思想, 652, pp.139-140 の一部を参考にした。なお、リクールが用いる言述(ディスクール)の概念はパロールの概念とはほぼ同義であり、彼はこの2つの概念を自由に使い分けられているとされている。詳しくは、巻田悦郎 (1997) リクールのテキスト解釈学, 晃洋書房, 京都, p.104 を参照されたい。
- 43) Benveniste, É. (1966) Problèmes de linguistique générale 1. Paris, Éditions Gallimard, p.25. 『バンヴェニスト, É. : 岸本通夫監訳 (1983) 一般言語学の諸問題. 東京, みすず書房, p.27.』
- 44) *Ibid.*, p.63. 『同上書, p.70.』
- 45) Benveniste, É. (1974) Problèmes de linguistique générale 2. Paris, Éditions Gallimard, p.64. 『バンヴェニスト, É. : 阿部宏監訳 (2013) 言葉と主体—一般言語学の諸問題—. 東京, 岩波書店, p.58.』
- 46) *Ibid.*, p.64. 『同上書, p.58.』
- 47) *Ibid.*, p.64. 『同上書, pp.58-59.』
- 48) *Ibid.*, pp.64-65. 『同上書, p.59.』

受付 2017年9月14日

受理 2018年4月27日